

■ □ ■ 新発見の夏目漱石書簡について ■ □ ■

1. 書簡の発見

平成24年に楚人冠宛書簡が入ったファイルに関係者からお借りし整理したところ、その中から石川啄木の書簡などとともに夏目漱石の書簡が見つかる。

2. 今回発表の理由

発見後、その書簡の調査が終了するとともに、漱石没後100年にあたったため。

3. 夏目漱石と杉村楚人冠との関係

漱石と楚人冠の出会いは東京朝日新聞社である。楚人冠は明治36（1903）年に当初は外電の翻訳と外国人の取材のために入社し、漱石は東京帝国大学で教鞭を執っていたが、楚人冠入社後の4年後の明治40年に文筆活動に専念するため東京朝日新聞社に入社した。

漱石は明治42年に文芸欄を新設し、自ら編集にあたった。この文芸欄によりたくさんの人々に作品の発表の場をつくったのである。ちょうどこの頃、編集会議などの際に漱石や楚人冠らは社の近くの交詢社で昼食を摂っていたことから、この頃には二人の関係が築かれていたことがわかる。しかし、数年後、社内の派閥対立から文芸欄の廃止が持ち上がる。そして、明治44年に漱石入社の際に動き、漱石が信頼していた主筆の池辺三山が朝日新聞社を退社したことにより、漱石は文芸欄の廃止を決断する。その頃の漱石は胃潰瘍で悩まされており、明治43年には転地療養先の修善寺で一時危篤になるほどであった。その際楚人冠は、修善寺にも見舞いに行っている。

4. 今まで確認されている書簡について

今回新たに発見された書簡以前に杉村楚人冠関係資料として確認されていた夏目漱石の書簡は9通。内容は以下のとおり。

- ①楚人冠の娘麗子（うらこ）死去でのお悔み（明治43年1月21日）
- ②楚人冠の記事への感想（明治43年6月4日）
- ③本寄贈の礼状（明治43年6月17日）
- ④楚人冠の英文解釈について
（明治44年5月15日、18日、20日か、21日）
- ⑤軸揮毫につき（明治45年6月3日）
- ⑥外国誌購入について（大正4年11月17日）

5. 今回発見された書簡の意味

①明治43年1月19日書簡

この書簡は、麗子の死去を聞いたその日に漱石から送られた。そのことから漱石が楚人冠をとっても心配していることがわかる。また、その2日後に行われた葬儀の際も改めて楚人冠に見舞いの書簡を送り、その際に楚人冠の記事を参照にして書かれたエピソードを含めた

『それから』も送っていることも書かれている。以上2通の書簡を合わせて考えると、今まで漱石と楚人冠の関係が良かったことはわかっているが、それを裏付ける資料の一つとなった。また、今までは明治44年1月21日の書簡が、楚人冠宛漱石書簡の一番古いものと考えられていたが、それ以前の書簡が発見されたことになる。

②大正元年12月24日書簡

この書簡では、二つの情報が隠れている。

一つ目は、夏目漱石が電話を引いてすぐであったこと。また、電話の掛け方が分からないので教えてほしいということ、二つ目は東京朝日新聞社に出勤しないことを楚人冠が心配しているが、怒っているわけではないということである。

まず、一つ目の書簡では年号が判らなかったが、『漱石全集』を見ると、大正元年12月11日に安倍能成（よししげ）書簡で「二三日前拙宅へ電話据付相済候」とあり、年代が確定した。このことから電話を付けてすぐに使ってみた様子が窺える。二つ目の理由を考えると、その前の書簡で楚人冠が漱石の機嫌を尋ねたようである。この時期漱石は文芸欄も廃止し、実は辞意も表明していた。そのことと入社しないことが重なったためであろう。漱石としては、体調もあまりよくなく、「行人」の連載を始めたころであるので「社へ出ぬ事は無精にて怒っているあらず（中略）全くの処面倒だからのりりくらり致し居る次第なり」と言っている。ここで、漱石と楚人冠の間を窺わせる一文が「怒ったって僕のようなものがどう致す訳にも相成かね候」である。漱石が怒ったところで会社に影響を与えられないと、率直な意見を楚人冠に伝えていることから、同僚として気兼ねなく自分の心情を言える立場に楚人冠がいたことがわかる。

6. 書簡の真贋について

今回の書簡は夏目漱石の専門家に真贋鑑定はしていないが、今回整理したファイルの中に長いこと所在不明であった石川啄木の書簡があったこと、そのファイルの中には楚人冠に関する書簡が多数あり、長年そのまま保存されていたことを考え真筆と判断した。

参考文献

我孫子市文化財報告第6集『楚人冠と漱石—新聞・英語・文学』2012年